東海地方における近世臨済宗本堂の研究（その１）

臨　済　寺　本　堂

杉　野　　丞

Study on Main Halls of Rinzai Zen Sect in Tōkai District in Edo Period (Part 1)

A Main Hall of Rinzaiji Temple

Noboru SUGINO

This papers is the first of a series of studies on the main halls of Rinzai Zen Sect temples in the Edo period, which are remained in Tōkai district.

First, in this thesis I took up a Rinzaiji Temple in Shizuoka City. This temple not only has a historic background, but also a high rank among temples of Rinzai Zen Sect in this district, and moreover it's main hall is the oldest one among Rinzai Zen Sect main halls in this district.

Therefore it is necessary to restore to it's original state so as to understand it's characteristics as the main hall of Rinzai Zen Sect in the end of Muromachi and the beginning of Edo period. So I have studied to restore it to it's original state by finding traces of the repairing works done after it was first built.

Standing on the consequence of restoration, I explained the characteristics in the starting point of the modern main hall of Rinzai Zen Sect.

１．はじめに

中世末までの主要な禅宗建築については，臨済宗五山建築を中心とした禅宗伽藍の研究（註－１）また，禅宗仏殿については，細部に亘たる詳細な研究（註－２）が成されている。

さらに禅宗寺院の塔頭方丈については，中世に成立した書院等と共に多く論じられており，方丈の成立については，川上貢博士の「近世的塔頭方丈成立過程の考察」があり，中世末から近世初頭にわたる，残存臨済宗寺院の塔頭方丈・その他については，文化財修理報告書もかなり刊行されて，その概要も知り得る。（註－３）また，横山秀哉博士は，「禅宗建築の研究」（註－４）の中で近世禅宗建築について，臨済宗寺院でも曹洞宗寺院本堂と同様に伽藍の中心となるべき法堂を，やがては仏殿をも兼ねて，方丈形式の建物をもってあて，ここで法式・説法・接客のすべてを行ない，後世これを本堂と称するに至っていることを指摘されている。

近世臨済宗本堂は，元来こうした禅宗方丈から発生したものであるが，これら臨済宗本堂が近世にどのように発展してゆくのかは未だ明らかにされていない。一方，曹洞宗本堂は江戸時代に，方丈本来の平面形式を保持しながらも（整形８室も含む）早くから仏堂的手法を取り入れる方向に発展をみせるが(註－５)，他方近世臨済宗本堂は，方丈の原形を長く保ち，方丈各部の意匠も後世まで長く残されている点に注目出来る。

本研究では，全国各地に散在する近世臨済宗本堂について考察を進める前提として，まず，東海地方に地域を限定し，可能な限り多くの実例にあたり，それらの遺構を原形に復した上で，その平面形態，各部構造，意匠について詳細に比較検討し，その発展の過程を明らかにしようとするものである。

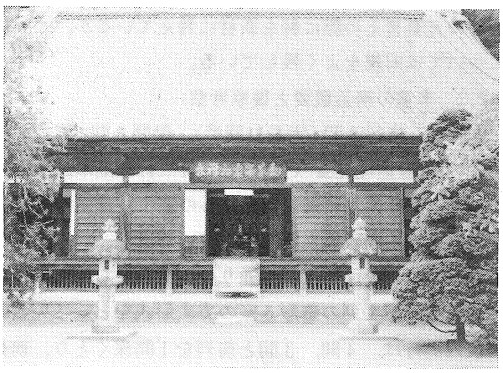

写真１　本堂正面

本稿では，まず当地方に残る最古の遺構であり，且つ格式の高い静岡市臨済寺本堂を取り上げ，近世初頭の臨済宗本堂の原点を明らかにすることとしたい。

2．臨済寺

2.1　沿革

当寺は，享禄年間（1528―1532）に中承芳和尚（今川氏親の3男，後に還俗して義元となる。）のために建立された寺で，天文5年（1536）氏親の嫡子氏輝が卒した際この寺に葬られ，その法名を取って寺号を善得院から大龍山臨済寺と改めている。同年太原和尚が当寺に住し，師僧大休国師を請じて開祖とし，自ら二世となり，今川家の執権職を兼ねた。このため後奈良天皇の勅願所と定められ，「勅東海最初禅林」の勅額を賜わっている。

永禄11年（1568）武田信玄のために諸堂兵火に遇い，翌年信玄朱印の制札を立て，寺領を寄せ，元亀3年(1572)正親町天皇の勅命により武田勝頼が再建するが，再び天正10年（1582）徳川家康が，当寺の後方に在った武田の城を攻め，この時に伽藍を焼失している。

同年8月（1582）正親町天皇更に家康に再建を命じ，再び伽藍が復興されて，天正15年（1587）に諸堂も完成しており，この時の本堂が現在に残る(註―6)。このように，創建に当たり今川氏の外護を受け，家康が今川家の人質であった時代に当寺で太原和尚に学んで以来，徳川家との因縁も深く，以来徳川氏から朱印状，寺領寄附状等多くを拝領している。

さらに寺記（註―7）によれば，本堂（方丈）は天正15年（1587）に供養され，慶長12年（1607）諸堂修覆，享保12年（1727）方丈・諸堂修覆，享保18年（1733）3月庫裡落成（同16年着工），延享4年（1747）方丈修覆，宝暦4年（1754）鐘楼建立，安永9年（1780）方丈修覆，寛政7年（1795）方丈屋根修覆，同8年（1796）勅使門大修覆，文政6年（1823）書院改築着手，同7年（1824）4月書院落成，天保3年（1832）方丈修覆とあり，さらに明治19年(1886)，昭和38年に本堂(方丈)を修理し，その後の瓦葺替えの際に軒を新材に替えているが，その他については旧規をよく残している。

2.2　本堂の構造概要と復原考察

本堂は，桁行9間（実長11間半），梁間8間（実長8間半），入母屋造桟瓦葺（元柿葺），軒二軒疎垂木，木舞打ち，妻二重虹梁大瓶束の南面建ちの堂で，堂南西隅に南を入口とする唐破風玄関を附している。

堂平面は，前面に1間半通りの広縁を通し，この後方に前後2列横3列の整形6室の方丈形式をとっている。前後列奥行は，4間，3間と前列を1間深くとり，前列中央間口3間（実長3間半）を室中，この東西両脇間口各2間（実長3間）を上・下の間とし，後列は室中後方を仏間，上・下の間後方を上・下奥の間とする。さらに室部分の両側面にも1間幅の（但し西側広縁と東側広縁の一部は，後世1間半に拡張されている。）広縁を通して，正面広縁と結び，広縁は正側面3方に廻る。

また，軸部柱は，玄関正面を除きすべて面取角柱を用い，柱は堂正面広縁外で5寸7分(面内4寸5分)，他で5寸（面内4寸）角のものを用い，堂内の室部分外側柱列では，略1間毎に柱を配し，各柱戸当り面に方立を打つなど柱の木柄，立て附け，柱配列に室町時代の方丈の手法をよく残している。このように平面形態は，中世以来の禅宗方丈の形式を保っており，寺格の高さもあって規模も大きく，当地方では他に類をみない遺構である。

このように建立当時の姿をよく残したこの本堂の平面も，後世堂正側面の広縁と堂内後列各室に改造を受けており，これらをさらに復原すると次のような整然とした方丈形態を示す。（図1）

本堂正面広縁外は，元は柱間3間とされ，中央間口実長3間半，両脇柱間実長4間として，柱上に直接桁を置き，桁は水繰付巨材で，それを3スパンに渡し，下を開放とし，正面広縁は床を板張りとし，天井を化粧軒裏としていた。（写真―1，2）

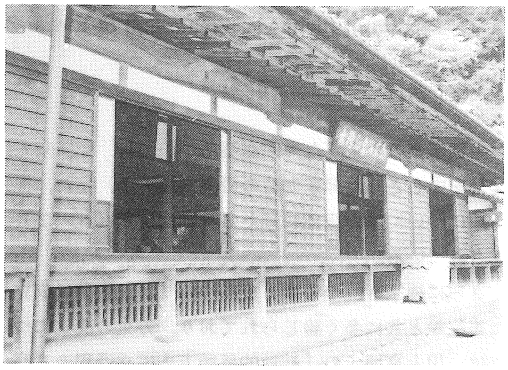

写真2　本堂正面柱間3間

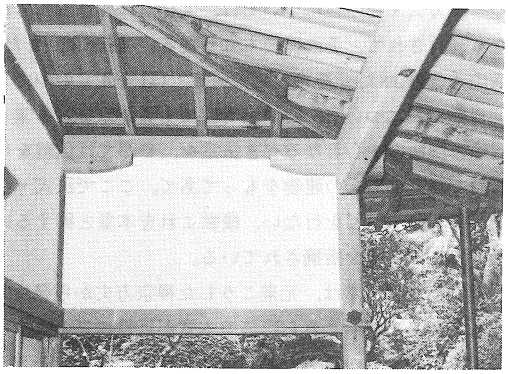

写真3　上奥の間広縁の背面上部

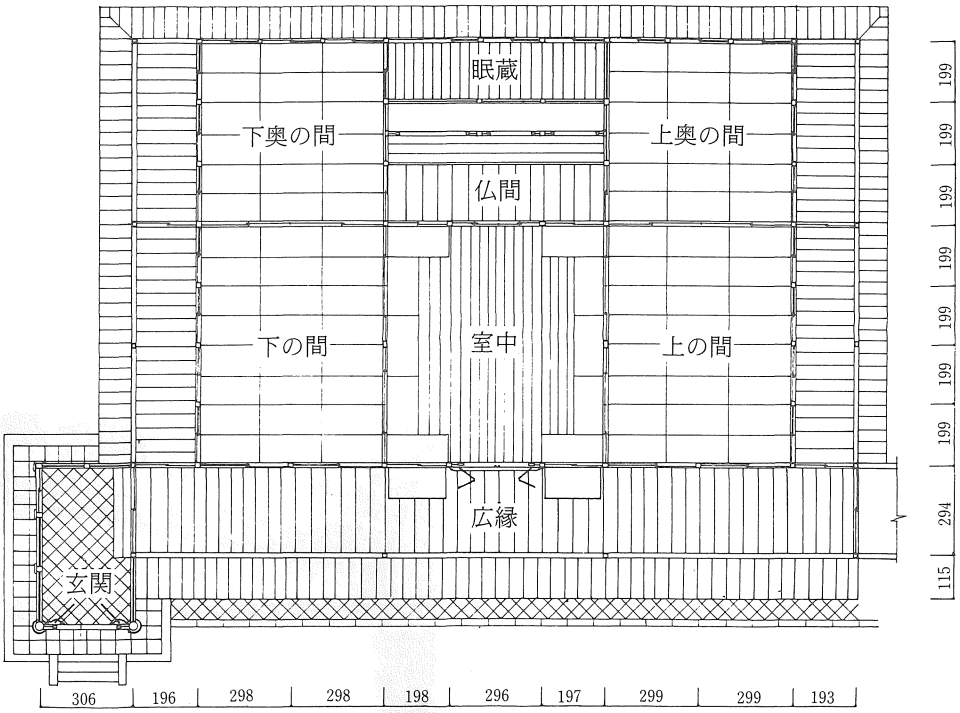

図１　臨済寺本堂　復原平面図

堂両側面広縁は，元は上・下の間の広縁で，外側中央に柱を立て，前後各２間に分けて，これら柱上に実長２間の２スパンの水繰付大桁を渡し，上・下奥の間の広縁では，外側の前後端柱間に実長３間の１スパンの水繰付大桁を渡たし，いずれも桁下を開放にし，上・下の間広縁を含め堂両側の広縁は，正面広縁同様床を板張りとし，天井を化粧軒裏としていた。（写真３）また，上・下の間側面広縁の前端と後端には，敷鴨居・内法長押を通し，この間に杉戸２枚を入れ（写真４），上部で母屋と側桁とを結ぶ水繰付繋梁を渡していた（写真６）。また，これら両側面広縁と正面広縁との軒の納まりは，正面広縁幅が１間半で，両側面広縁幅１間と異なるために，室部分正面両端の柱上部から隅木を出すことは不自然で，ここでは，広縁に隅木を見せず正面広縁の化粧軒裏を延長しており，当初からこの上の野隅木を用いて，軒先に出る隅木を支えていたと思われる。

以上が復原結果であるが，現在堂正面では両端の柱より内方１間位置に柱を立てて柱間を５間とし，各柱間に敷鴨居・内法長押を通し，中央３間柱間では，横舞良戸４，障子２を入れ，両端柱間では，西端に板戸２，東端に片引戸を入れ，旧広縁は堂内に完全に取り込まれているが（図２），正面両端内方１間目の柱は新しく，面取り

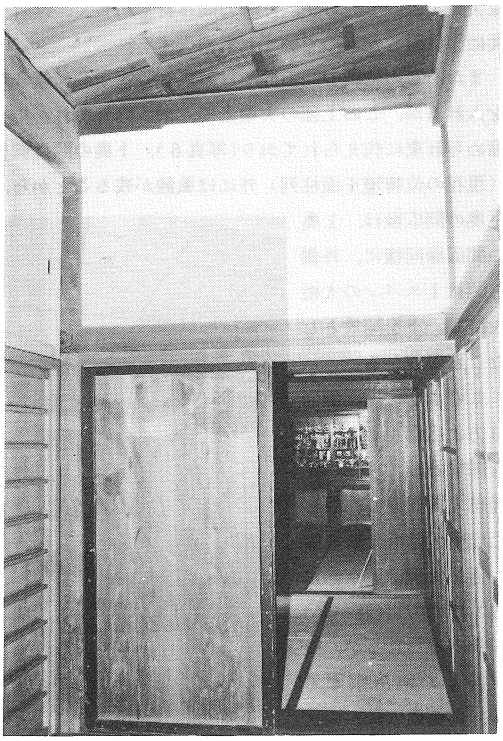

写真４　下奥の間広縁前面の杉戸

も少なく，大桁の中間を支えていることから後補で，正面間口3間とした旧柱内側と堂内前列各室の柱前面に風蝕が残ることから，広縁外柱間装置はすべて消失し，旧正面間口3間はすべて開放とされたことが分かる。

また，現在正面間口3間とした旧柱上には舟肘木を載せるが，これは後入れで，このことは，堂東側面後半の広縁外で柱上に舟肘木を用いていないことからも分かる。また，現在堂正面東端に附く長3畳半の下屋は材も新しく後補である。

堂両側面の広縁は，現在西側広縁で半間通り，東側広縁前端より2間が半間分拡張され，上・下の間側面広縁は，共に前後2室に分けて，上の間広縁では，前方に6畳，後方に長4畳の室を設け，下の間広縁では，前方から廊下，2畳の室と押入れ，後方に6畳の室を設けるなど大きな改造を受けているが，上の間広縁の長4畳の室，下の間広縁の廊下部分では，旧広縁の化粧軒裏とこれを支える水繰付大桁をみせており，さらに両側面広縁の旧外側柱と上・下の間両外側面の柱に風蝕が残ることから，この両側広縁外側柱間は開放とされ，柱上に大桁を渡していたことが分る。

上・下奥の間側面広縁は，現在上奥の間広縁で，旧状をそのまま残すが，下奥の間広縁では，略10帖の位牌の間に拡張され，下奥の間西側3間に奥行半間通りの位牌壇を入り込ませ，背面に半間の下屋を出し，室全体に棹縁天井を張っているが，位牌の間は材も新しく，位牌壇共に後世附したものでいずれも消失する。

また，この位牌の間前面では，現在敷鴨居間に襖4枚を入れるが，この上部の大梁上で，旧広縁外側柱が切り縮められ束に代えられており（写真6），下奥の間外側柱（現在の位牌壇正面柱列）外には風蝕が残ることから，下奥の間広縁は，上奥の間広縁同様に，外側柱間に1スパンの大桁を渡し，下を開放としたことが分かる。

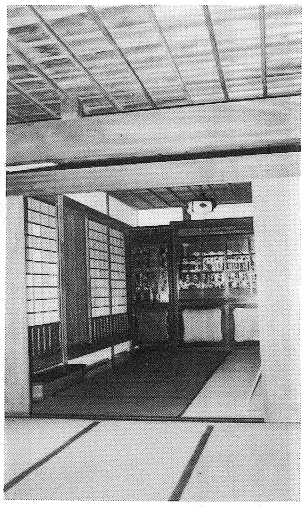

写真5　下奥の間広縁前面上部大梁と束

このように，正側面3方に広縁を廻し，外を開放とし，柱上に水繰付大桁を渡し，さらに母屋と側桁に繋虹梁を通した例は，京都に残る塔頭方丈（註―8）に多くみられるが，後世多くの臨済宗本堂が，両側面広縁から次第にこれを室として取り込み，江戸時代の比較的早い時期から，正面広縁までも堂内に取り込む傾向をもつことからすれば，ここでは古式な方丈形式をよく残し，柱上部の大桁の扱いなどは，古風な手法を忠実に守っていると言える。

次に室内部は，後列各室で後世の改造を受けるものの，全体に旧規をよく残すため，一部の改造を復原した上で，各室の旧状を眺めてみることとする。

堂内各室境は，元柱間に敷鴨居・内法長押を通し，鴨居にはつけひばたを附し（写真7），外側柱間では，正側面3方の広縁が開放とされるため，室部分外側柱間すべてに横舞良戸2，障子1を入れ戸締りし，内法上を小壁

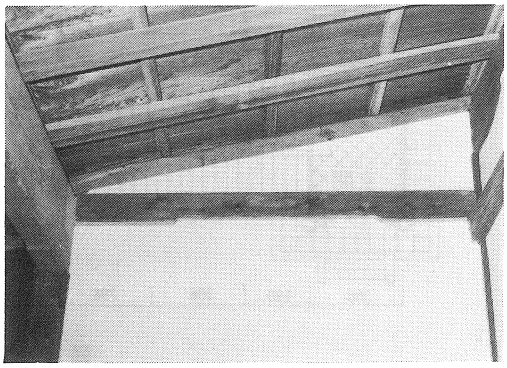

写真6　上奥の間広縁前面見返り上部の繋梁

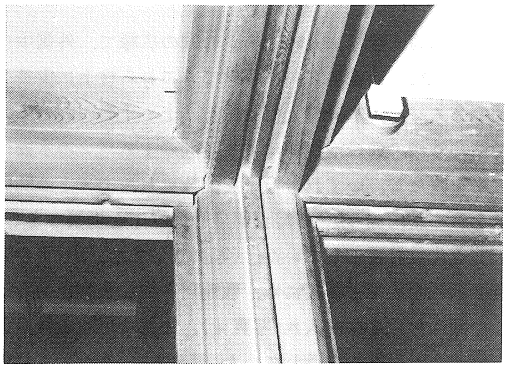

写真7　室中正面東端隅柱内法見返り

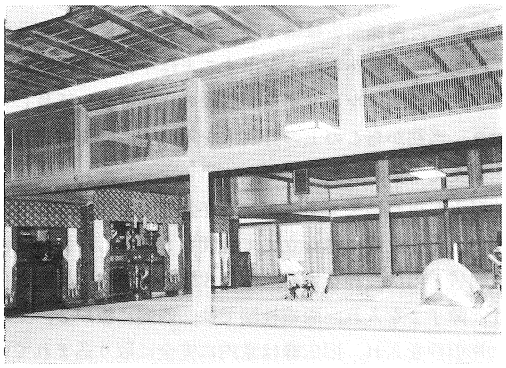

写真8　室中西側面

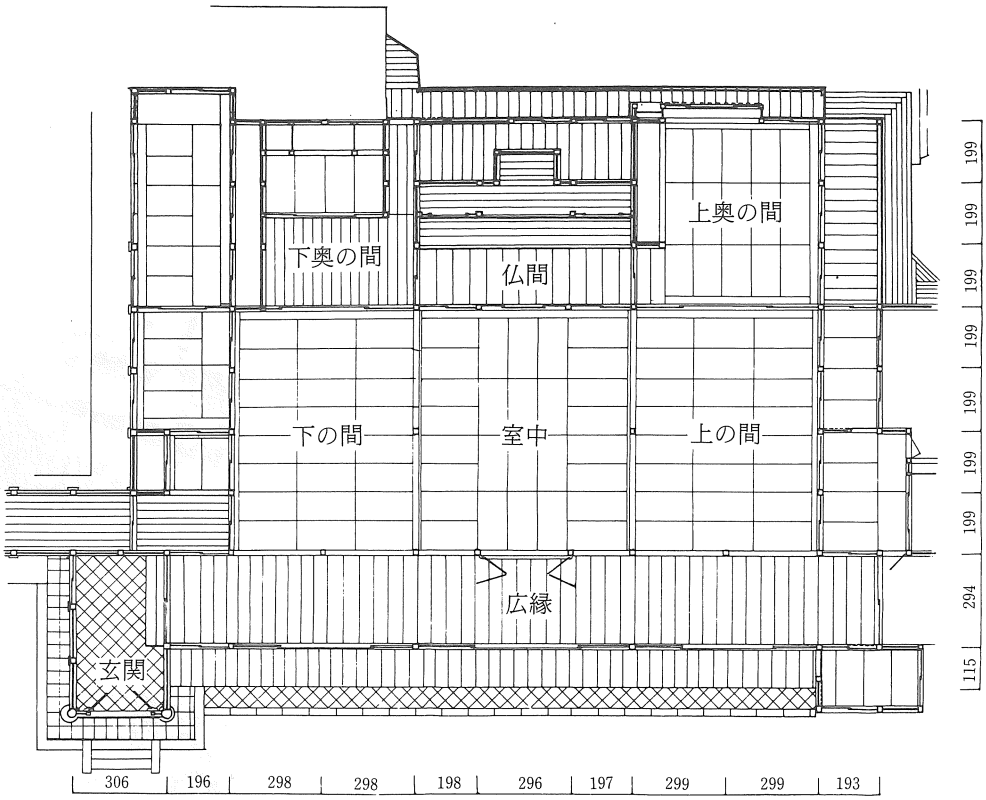

図２　臨済寺本堂　現状平面図

とし，飛貫位置に長押を通し，柱上には舟肘木を置き，幅の狭い軒桁を支えた。

室中は，元正面柱間を中央間ロ１間半，この両脇間ロ各１間とし，中央柱間では，内法を高くして敷居・楯を通し，ここに藁座を打ち，敷居，楯間に方立，脇羽目を入れ，この間に双折桟唐戸を吊り，この両脇では，外に蔀戸を吊り，内に障子２枚を入れた(写真９)。このように室中正面中央に双折桟唐戸を吊る例は，臨済宗本堂では，規模の大きな本堂で後世まで残り，一般的と言えるが，その両脇に蔀戸を吊る例は，この時代の遺構では知られておらず，禅宗方丈最古の例である京都竜吟庵方丈にみられるのみである。

さらに各室内部についてみると，室中は，両側面中央に柱（長方形断面）を立てて，柱間を２間とし，これら各間に釣束を入れるため，内法上は４分割され，ここに筬欄間４を入れ(写真８)，内法下は襖４枚引とし，床を板間に畳廻り敷きとした。天井は各室すべて棹縁天井とし，柱上部の蟻壁長押と蟻壁は，仏間を除きすべての室に廻した。また，上・下の間，上・下奥の間も元は，いずれも床を畳敷とし，上・下奥の間正面では，内法上中央に釣束を入れ，内法下に襖４枚を入れ，これら各室には床，書院等を全く設けていなかった。

仏間は，正面柱間を室中正面に揃えて３間とし，内法を一直線に通し，各間に襖２枚を入れ，内法上には筬欄間３を入れた（写真12)。仏間後方には，中央に奥行１間通りの框・束・羽目板からなる簡素な一直線仏壇を設け(写真10)，仏壇後半の奥行半間通りでは，西端から１間半，中央と東端を各１間に３分し，中央に阿弥陀，西に当山開祖雪斉和

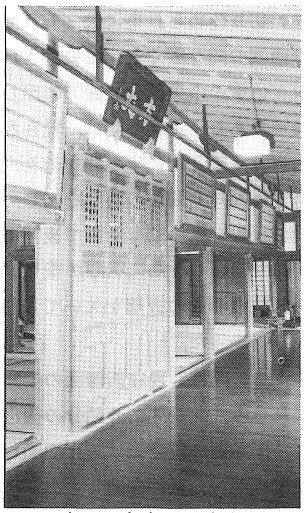

写真９　室中正面中央の双折桟唐戸

尚，東に開基今川義元を祀っていた。仏間両側面の前端柱間は，上・下奥の間への通路として襖2枚を入れ，仏壇両側面を真壁とした。仏壇背面には，幅1間通りの眠蔵を置き，この西側面に下奥の間への通路として襖2枚を入れ，東側面に真壁を入れた。眠蔵背面は，前述したように各柱間に板戸2，障子1を入れ，戸締りしたが，このような例は，後世の臨済宗本堂には見出されていない。（写真11）

以上が，堂内室部分の復原された結果であるが，これらの復原過程を次に摘記する。

現在，各室外側柱間は，前列各室正面では建具をすべて外して，ここに通る鴨居にはつけひばたの3本溝を残しており，元は建具3枚（横舞良戸2・障子1）を入れたが，室中正面両脇柱間では，鴨居に2本溝，外に蔀戸の吊金具を残すことから，元は外に蔀戸を吊り，内に障子2枚を入れたことが分かる。この他の外側柱間では，現在建具2枚を入れているが，ここにも元は建具3枚を入れたことが鴨居に残こる溝から分かる。

室中は，現在畳敷とするが，この下の床板は磨き込まれ，この一部に畳敷の痕跡を残すことから，元は板間に畳廻り敷きとしていたことが分かる。室中両側面では，現在建具を外しているが，鴨居には2本溝が残り，元は襖4枚を入れて間仕切った。仏間は，現在正面中央柱間で，内法を一段上げているが，この中央間両脇の柱の内側では，この両脇に通る鴨居と同じ高さに旧鴨居の圧痕を残し，正面柱間3間に一直線の長押を通していたことが分かる。また，仏壇は現在仏間正面柱列に合わせ，中央を広く3分されるが，これら仏壇背面では，この後方にできる旧眠蔵の背面柱列と同柱通り（西端を広く1間半，中央・東端を各1間とする。）で，旧仏壇を3分した柱が切り縮められ束に代えられていることから，旧仏壇は西端の間を広くとって分割されたことが分かる。また，現在仏壇の中央部分で後方に出している仏龕は，新材で後補である。上奥の間は，現在西側面半間通りで前1間に板敷，後2間に床の間を造り，背面では，中央より西寄りに間口2間弱の書院を出しているが（写真13），西側面の板敷と床の間は新材で後補であり，背面書院も書院正面両脇柱の外側に風蝕が残り，さらに堂背面の旧長押が書院両側面の板壁を欠いて入り込むことから，書院も元は無かった。

下奥の間は，現在西側面の半間通りに前述の位牌壇を入れ込み，北西隅に6帖分の徳川家康を祀る霊廟を設けて，床を框一段分上げ，正面間口2間に襖4枚を入れ，内法に鴨居，長押を通し，上部に筬欄間2を入れ，両側背面を板壁としており（写真15），霊廟内部は，前を4畳敷とし，後方半間通りに仏壇を設ける。しかしこの廟は，後世家康を祀るために附設したもので，元は無く，下奥の間も上奥の間同様に室内には床・書院等一切用いず，整然とした室を構えたことが分かる。一般に後世これらの室の側背面には，床・書院の他に押入れまで附される傾向があるが，この点からすれば，近世初期の本堂の上・下奥の間の扱いが如何に簡素であったかが分かる。

一方，堂南西隅に設けられた玄関は，間口1間半，奥行3間で床瓦四半敷とし，玄関内とは正面広縁の西側面に通じている（写真14）。正面両端では，粽付丸柱を礎盤上に立て，柱上に頭貫（端木鼻），台輪（端花頭形）を通し，地覆，頭貫に蕨座を打ち，この間に両開

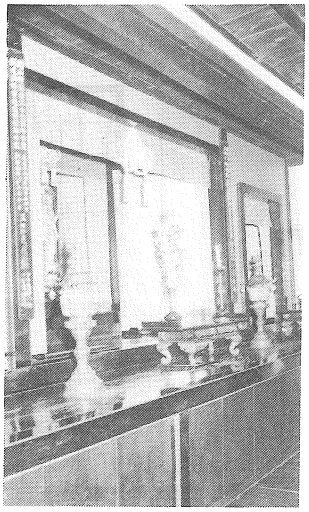

写真10　仏間後方の一直線仏壇

写真11　眠蔵背面

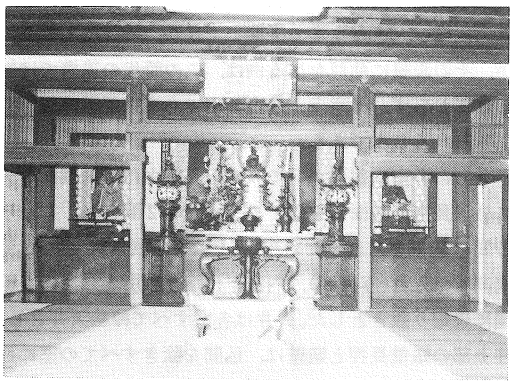

写真12　仏間正面

桟唐戸を内開きに吊り，柱上に出三斗々栱を置き，この中備には３分点に拳鼻付き平三斗々栱（写真16）を載せ，上部に虹梁（渦・欠眉，袖切付）を渡し，中央に大瓶束を立てて棟木を受け，虹梁端に桁を出して，唐破風をあげ，破風端絵様付き，破風拝みに兎の毛通しを付す。背面の妻では，角柱上に舟肘木を載せ，この上の虹梁上に板蟇股を置いて棟を支える。軒一軒疎垂木，内部化粧軒裏とし，全体として禅宗様式に統一されている。

このような本格的な玄関を備えた例は，京都に残る多くの方丈では一般的であるが，地方の臨済宗本堂で玄関を構えるものは，寺格の高い寺院に限られている。

3　結び

以上，当地方における近世臨済宗本堂の最古の遺構である臨済寺本堂について，復原結果に基づいてその特徴を述べてきたが，まずその平面形態は，堂正側面３方に広縁を廻らし，その内方に前後２列横３列の整形６室を構えた方丈形式をとる。また堂内各部構造・意匠についてみると，軸部柱は，室部分外側柱列では略１間毎に柱を配し，柱上に舟肘木を載せ，柱間に横舞良戸２，障子１を入れ，室中正面中央に双折桟唐戸を巾り，両脇に蔀戸を入れて戸締りし，各室境では襖引違いとし，すべて間仕切る。広縁では，外側柱間に大桁を渡し，この下では舟肘木を用いず，下を開放として化粧軒裏をみせる。堂内各室は，床を室中・仏間で板間とする他は畳敷とし，天井はすべて棹縁とし，仏間を除く各室上部には蟻壁を廻す。室中では，両側面中央に柱を立て，内法上に筬欄間を入れるが，仏間正面でも同様に筬欄間を入れている。

仏間では，一直線仏壇を設け，背面には眠蔵を置いている。また，上・下奥の間では，床・書院等は一切用いていない。このように，当本堂は全体に中世来の禅宗方丈の形態を忠実に守っている。さらに，平面寸法は，柱間心々を略６尺５寸（正面桁行で６尺５寸≒197cm，側面梁行で６尺５寸６分≒199cm）に計画され，内法寸法を畳に合わせるのでなく，柱心々を整数にとる古式を見せ，細部の仕事は軸部・柱は木柄が細く，柱の面は大きく，舟肘木は軽快で，戸当たりには方立を附し，鴨居につけひばたを打つなど，細部に渡って，室町時代の伝統的な方丈の姿をよく伝えており，当地方では比類ない地位を示している。

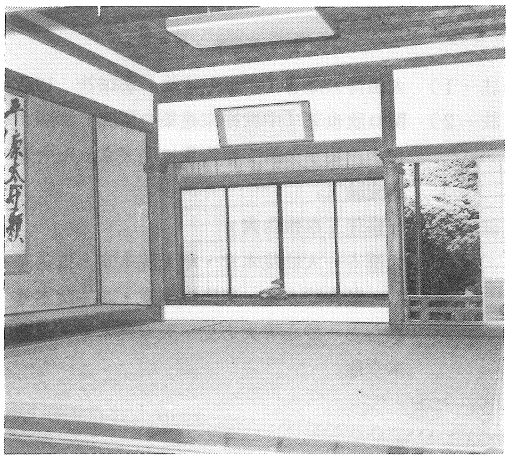

写真13　上奥の間の床・書院

写真14　唐破風玄関正面

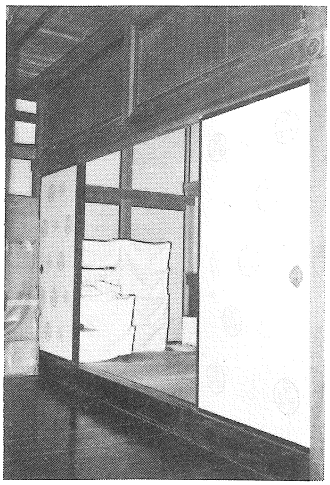

写真15　下奥の間の霊廟

写真16　玄関斗栱の拳鼻絵様

参考文献

（註－1）　太田博太郎著「中世の建築」彰国社　1957刊
（註－2）　関口欣也著「中世禅宗建築の研究」に関する日本建築学会論文報告集に発表された一連の研究論文。
（註－3）　「修理工事報告書」
大徳寺－大仙院本堂・竜光院本堂・孤蓬庵本堂・黄梅院本堂・興臨院本堂・端峯院本堂
妙心寺－妙心寺大方丈・天球院本堂・退蔵院本堂他。
（註－4）　「禅宗建築の研究」に関する東北大学建築学科建築学報に発表された一連の研究
（註－5）　拙稿「東海地方における近世曹洞宗本堂の研究（その1）」龍溪院本堂　愛知工業大学研究報告 No. 1980
拙稿「東海地方における近世曹洞宗本堂の研究（その2）」西明寺本堂　愛知工業大学研究報告 No15. 1980
（註－6）　堀由蔵編「大日本等院総覧」名著刊行会. 1966 P1511, P1512
（註－7）　古心庵待史　臨済寺年表.

（受理　昭和56年1月16日）